

工業地域の再生と「豊穡化の経済」 —場所の記憶、ツーリズム、コミュニティー—

【代表者】

小関珠音 大阪市立大学 都市経営研究科 准教授

【共同研究者】

藤田和史 和歌山大学 経済学部 准教授

川口夏希 大阪市立大学 都市文化研究センター 研究員

立見淳哉 大阪市立大学 経営学研究科 准教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

認知資本主義論や「資本主義の新たな精神」（ボルタンスキ&シャペロ, 2013）として議論されてきたように、新たな社会・経済が現れつつある。2000年代に話題を呼んだ、フロリダのクリエイティブクラス論や、スコットの認知的文化的経済論もまた、こうした大きな文脈に位置付けられるものである。

ただし地理的に見ると、関心の中心は創造産業などを惹きつける大都市であり、他方で、衰退を余儀なくされている、かつての工業地域の課題や可能性については十分に検討されているとはいえない。本研究は、資本主義の変容という大きな文脈の中で、そうした工場地域の新たな可能性について模索することを目的とする。本研究が依拠するのは、ボルタンスキ&エスケール (Bonltanski et Esquerre, 2017) が近年提起している「豊穡化の経済」という視点である。今日、財の価値は、ますます、「すでにあるモノ」を豊穡化する活動によって特徴づけられるようになっており、その中で衰退地域の再生の可能性が生まれつつある。豊穡化に際して、「場所の記憶」がどのように構築され、さまざまな地域資源が（しばしば、ツーリズムを介して）結びつけられ、地域課題への対処や新たな財・サービスの価値付け活動の創出などにつながるのかを検討する。

【研究成果（報告書より抜粋）】

本研究資金を用いて、各研究者がそれぞれのフィールドにおいて調査を行った結果、研究課題として掲げた「豊穰化の経済」が、欧米諸国において顕在化しつつあり、かつ日本においてもその傾向があることが確認された。海外事例については、研究代表者（小関）は、イタリアのピエモンテ地域のワイナリー等食品業、またヴェネト州の家具産業などの産業活動において、地域のデザイン資源を活用し、クラフト製品、食品及びツーリズム企画などの多様な活動に繋がっていることを確認した。小関は、平成30年3月に女性研究者短期留学助成金を活用してパドバ大学に滞在したが、本助成金を活用した再訪により、その関係性を深めることができ、同大学と大学間提携及び部局間提携（先方：経済経営研究科、当方：都市経営研究科）を実現した。立見は、創造産業における価値づけの仕組みを探り、新たにフランス・パリのアート市場を事例とした研究に着手した。同市場の構成要素と関連の諸アクターを特定した。

さらに国内事例については、小関が山形県（米沢市/寒河江市）新潟県（燕三条地域/佐渡島）における地場産業の活性化の事例を検討した。双方の地域において、デザイナーの関与によって、地域の技術・素材・歴史を豊穰化することで、創造産業市場における価値付けがなされつつあることを確認した。立見は、新潟県燕地域の中小企業がデザイナー、バイヤーと連携し開発した製品が国際的に定評のあるデザインアワードを獲得するに至る過程を検討し、価値づけの仕組みを明らかにした。

藤田は、産業集積地域において、地元工業高校が人材育成・起業人材排出に果たす役割について、最盛期の1/2にまで規模を縮小しつつある長野県諏訪地域を事例に調査・検討した。卒業名簿から諏訪地域のO工業高校機械化卒業の生徒の進路を分析し、少数ながらも卒業時点において家業を承継し、集積の維持に一定の役割を果たす生徒があることを確認した。また、これらの卒業生が一定期間を経過した後に、起業・独立創業を果たすなど起業家として成長をしているのか、現在追跡調査を行っている。川口は、兵庫県篠山市の先進的事例を検討することで、「豊穰化の経済」における社会経済の再生の可能性を探った。空き家のリノベーション・再生を中心に人口減少に悩む同地域の活性化がもたらされている例を検討した。この成果は、『Urban Scope (Osaka City University)』誌 (vol.10, 2019) に査読論文（英語）として掲載が決定している。

また、本研究において、研究者間のドメインの近似性と相互交流による付加価値向上の可能性が確認されたことから、平成31年度においては、①日本国内の地域産業集積（主に工業分野）/当該地域の大学等において創造された先端科学技術の伝播、②繊維産業等デザイン資源を活用する日本企業の海外（主にフランス・イタリア）進出の分析について、研究交流を継続することとなった。

研究業績		
※助成期間中に本研究課題を基に発表した著書、学術論文、学会発表、報告書等		
著書名/論文名/発表タイトル 等	発表年	出版社名/掲載雑誌名/学会名等
立見淳哉「モノのデザインと価値づけ活動－調理道具「コンテ conte」の開発から－」	2019年3月 (印刷中)	『季刊経済研究』第39巻 第1・2号
立見淳哉『産業集積と制度の地理学－経済調整と価値づけの装置を考える－』	ナカニシヤ 出版	ナカニシヤ出版、2019年 3月.
立見淳哉「知識・イノベーション・文化」『経済地理学の成果と課題』	2018年12月	第VIII集（経済地理学年 報64巻別冊），pp.11-17.
「コラム 知識経済：認知資本主義と都市」経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』	2018年6月	原書房，pp.219-221
立見淳哉「パリのファッション産業における価値づけの装置」	2018年4月	『人文地理』第70巻第1 号， pp.25-48.

その他 ※特許、産学官連携、受賞、メディア取材など特筆すべき事項
<p>研究期間中に、研究代表者（小関）は、上記の通り、大学間提携及び部局間提携を実現したが、この提携に基づき、平成31年度は、双方の教育・研究協力のため、パドバ大学セディータ准教授に、学内での講演（都市経営研究科/商学部）を計画している。なお、研究代表者（小関）は、平成30年度に、パドバ大学での出講（Advanced Marketing, 3コマ）を実施し、平成31年度も同様の出講を予定している。</p> <p>また、本件に関連して、研究代表者は、下記の助成金（2件）を獲得した。</p> <p>【2019年度 大阪市立大学 外国人研究者招へい事業】パドバ大学 Sivia Rita Sedita 准教授招へい</p> <p>【日本証券奨学財団 2018年度研究調査助成金】『革新的科学技術を基盤とするベンチャー企業の資金調達の内実－英国 Patient Capital 概念の検証を踏まえて』（1,000,000円）</p>